令和６年度 とちぎ福祉教育研究会　報告

令和６年度の研究会協議テーマ
★昨年度のテーマ：「こどもたちに分かりやすい福祉教育動画」。

第２回：昨年度振り返りと本年度の協議事項について

・地域福祉とは本来大人も子供も参画すべきものである。
　ほとんどどの地域も子供は含まれていない。子供を巻き込む、もしくは核にしたものを検討すべき。（四天王寺大学 准教授 吉田氏）

◆これまではプログラム作りに特化。インプット・アウトプットをどうするかが課題。
入り方と出し方。１回１回のイベントで終わってしまう。気づきから築きにどう繋げていけるか検証してもいい。
◆実施してそのまま終わってしまっているところはある。
・実施した側（社協）でそれぞれアウトプットの方向性が異なってくると思う。

・現行の福祉教育はインプットの段階にある。
本年度は『**アウトプットの見通し**』について考えたい。

現在リフレクションについては各小中学校で行っている？
考えたことの発表の機会、アクションを起こすきっかけを作るべき。
“気づき”から“築き”へとつなげるために、**地域や他者（地域の人）との関係性を育めるようにしたい。**
・福祉教育で気づきを得たこと、学んだことについて発表の場を設けてみてはどうか。
→児童・生徒同士においては他者の意見の取り入れになり、発表を聞いた大人にとっては刺激や、子供の視点を知る機会を得る。－
→報告会として、まとめから発表まで主体的にできるとさらに良い。

第３回：各市町社協の福祉教育実施状況について

〇足利市社協 小学１年生に対し災害についての講座を開催
→協力型のゲームを行った。災害時には慌てないこと、協力しなければいけないことを体験してもらう。
〇小山市社協 体験型講座を実施しているが、ただ行うだけになっているような現状。
→宇都宮短期大学 宮脇氏より：担当の先生とまとめの結論（ゴール）を決めておく必要がある。
〇下野市社協 体験型福祉教育

体験型学習は技術講習にならないように工夫が必要。利用者と仲良くなることで共生社会

実現のきっかけになるかもしれない。
当事者はかわいそうではない。当事者と一緒に過ごすことでできることとできないことをしることができるかも。

宇都宮短期大学 宮脇氏より：逗子市社協の取り組みについて
・同じプログラムでも学年によって内容を変えて実施している。
例)「知的障がい理解」について
小学生：障がいを理解する段階。なんでも言葉にしてしまうという人との接し方について扱う。話すと嫌な気持ちになるから話さないのではなく、嫌なことを言われたら嫌と言っていいということを教える。コミュニケーションをとるということについて教える。また、優しい言葉(ふわふわ言葉)について教える。
中学生：マイノリティの尊重についての理解をすすめる。

第４回：各市町社協の福祉教育実施状況について

〇真岡市社協
・体験型がメインであるが、当事者の高齢化により車いす体験が行えない。
・ZOOM で高齢者宅と学校をつなぎ、動けない高齢者との交流を図った。
〇上三川町社協
・夏休み期間に包括と共同で中高生向けのサマースクールを実施。
・ボランティア活動をボランティアのかた主導で体験している。
〇那須烏山市社協
・高校生にプログラムを考えてもらい幼稚園との交流をしている。
・ハローアルソンの活動で市内各所に歯ブラシ回収 BOX を設置、回収したものを高校生と一緒に那須塩原市関口歯科に持参し、フィリピンに寄付している。
・当事者との関りが少ないことが課題である。
・事前学習の時間を十分に確保できていない。
〇高根沢町社協
・質問を投げかける形のプログラムになっている。
・体験型のプログラムについては協力団体に依頼し行ってもらっている。
・学校側の意図もあり、福祉教育が子供の調べ学習の一環になっている。
・福祉教育が単発でしかなく、その後の学習につながっているのか把握できない。

体験型を実施している市町で、当事者が高齢となり実施できないといような事案が散見されていた。本会では体験型は実施していないが、ゲストとして当事者を呼ぶことはあるためいずれは対策が求められる事案かと思う。

次回以降の研究会では、各市町社協が福祉教育に関して感じている課題について協議していく予定なので、課題を洗い出し有意義な機会にしたい。

第５回：大田原市社協「HUG」体験

前回の福祉教育研究会で真岡市社協が避難所に関する福祉教育を検討しているという話題になり、今回大田原市社協の HUG を体験する形となった。小学生用の UHG を参考にしたいという話だったのでこれを実施。

張り紙や配置など、現実的な視点で進めていたが、小学生から張り紙の案は出るのだろうかという懸念があるようだった。過去に実施した HUG の画像を見せると、小学生も張り紙を駆使しており、また、参加者よりも有効活用できているということで驚きの声があがっていた。

終了後、本来の HUG と改編した HUG の違いについて聞かれ、わかりやすい文章やイラストの有無について説明した。また、大田原市社協の「つながりの大切さ」を学んでほしいというねらいを説明。こういったねらいや改編内容とその目的はあらかじめ協力者と共有しておくとより有意義になるのではないかと意見をもらった。

人数の少ない学校での実施ならば、司会をしながらグループの見回り、アドバイスが可能だが、児童数の多い学校の場合は協力者への説明を強化していきたい。